

〔報告〕

岐阜県保健婦養成所 1 期生の卒業後の体験

坪内 美奈¹⁾ 松下 光子¹⁾ 大川 眞智子²⁾Experiences after Graduation of the First Students
in Gifu Training School of Public Health NursesMina Tsubouchi¹⁾, Mitsuko Matsushita¹⁾, and Machiko Ohkawa²⁾

I. 目的

本稿は、岐阜県保健婦養成所 1 期生の養成所での体験の続報であり、卒業後の体験記録である。前稿では、終戦前後の困難な生活の中で、生徒たちは合宿生活をし、学習環境が整っていない中で、助け合いながら学習を続けた様子が明らかになった。また、そのような困難な中でも 1 期生自身の努力と周囲からの期待により、生活の場で人々の健康を守るという基本的な職業意識が養成所で育まれていったと考えられた¹⁾。

本稿では、そのような養成所での体験をした 1 期生の、卒業後の看護職としての体験に関する情報を整理し、戦後の岐阜県固有の保健師活動の特徴を探りたい。1 期生のうち第一種生は昭和 21 年 7 月、第二種生は、半年早く昭和 21 年 1 月に卒業し、卒業後 60 年が経とうとしている。終戦後の混乱期の保健師等の活動について、この当時活動された方に話を聞くのは今の時期を逃すと難しく、記録として残す意義は大きいと思われる。なお、平成 13 年の保健師助産師看護師法の改正により保健婦から保健師に名称が改正された。本稿では、固有名詞や当時の名称を用いたほうが適切と考えた場合、当時の状況を記述している場合は、保健婦と表記している。

II. 方法

1. 情報収集方法

1 期生で了解が得られた人に、養成所時代の体験、卒

業後の経緯、印象に残っていることについて、対象者の自宅で個別面接または、電話にて聞き取り調査を行った。面接の場合、聞き取り内容は、了解を得てテープ録音を行い、録音内容を記述記録にした。電話の場合は、電話中のメモをもとに、終了直後に聞き取った内容の記録を作成した。1 人あたりの聞き取り時間は、面接は 1 時間半程度、電話は 20 分程度であった。

連絡のついた 1 期生 20 名のうち 10 名(第一種生 8 名、第二種生 2 名)から聞き取りと調査データにすることについて了解が得られた。個別面接後に、面接時には思い出さなかったがその後思い出し、自主的に文章にして筆者らに寄せられた体験もデータとした。情報収集期間は平成 15 年 7 月～平成 17 年 8 月である。

2. 分析方法

養成所 1 期生から得た情報の記録の中から卒業後の経緯と卒業後の看護職としての体験を所属別に分け、項目立てて活動内容により整理した。

3. 倫理的配慮

聞き取り調査では、個別面接の場合は、文書を用いて目的、方法、プライバシーの保護等について説明し、協力の了解を得た。電話の場合は、電話時の説明に加え、後日文書を郵送し、協力の了解が確認できた場合にのみデータとした。

1) 岐阜県立看護大学 地域基礎看護学講座 Community-based Fundamental Nursing, Gifu College of Nursing

2) 岐阜県立看護大学 看護研究センター Nursing Collaboration Center, Gifu College of Nursing

表1 卒業後の経緯

a: 保健所（定年まで）
b: 市役所（定年まで）
c: 保健所（約1年間）→小学校助教諭→小学校養護教諭（県外）
d: 保健所（3年間）→小学校教員（2年間）→保健所→中学校養護教諭（30年間）
e: 保健所（2年間）→小学校養護教諭（10年間）→退職・子育て
f: 保健所（1年半）→小・中学校の養護教諭（8年間）→他県で駐在保健婦（1年間）→出産育児退職
g: 病院→保健所（約2年間）→結婚退職→専売公社の衛生管理者として勤務
h: 村保健婦（国保保健婦）→結婚退職→助産婦（20年）→介護のため退職
i: 無医村（農業会）の保健婦→結婚退職
j: 養成所教員（3,4年間）→結婚退職

Ⅲ. 結果

1. 卒業後の経緯

卒業後の経緯は表1のとおりである。保健婦として保健所、市・村の国民健康保険組合、無医村の農業会に勤めたり、養成所の教員になっていた。

保健所に就職した人の中には、要請されて小学校の教員や小・中学校の養護教諭に転職した人もいた。定年まで勤務した人もいれば、数年後に結婚退職したり、数十年後に子育てや介護のため退職した人もいた。

2. 卒業後の看護職としての体験

1) 保健所保健婦としての活動体験

感染症に関わる活動、栄養改善、精神保健に関わる活動、町村駐在制に関わる活動等についての体験が語られた（表2）。感染症に関わる活動が最も多く語られた。結核については、痰の始末、健診、予防接種、家庭訪問等を実施し、保健所管轄内の村に医師がいない場合には、村に出向いて結核の健康教育をしていた。性病については、検診後の説明、治療のすすめ、診察介助、診療所受診後の家庭訪問、感染源調査などをしていた。また、生活改善活動による衛生対策もしており、小学校に出向いてのシラミ駆除のDDT噴霧、村長や村の衛生主任の理解を得ながら簡易便所を設置した体験も語られた。

また、貧しい時代で栄養失調が多かったため、保健所の栄養士とタンポポやセリなど雑草を工夫して食べる栄養指導をしたり、豆腐屋に依頼して豆腐の作り方を指導してもらうなど、専門職や住民と協働して栄養改善に取り組んだ体験が語られた。

国立公衆衛生院に研修に行った人もおり、保健婦の町村駐在制を保健所長に提案し制度を作った体験や、駐在保健婦として、乳児健診や家庭訪問、産児制限の講演などの活動をし、村人から喜ばれた体験が語られた。

2) 市、村（国保）の保健婦としての活動体験

感染症に関わる活動（表3）、母子保健に関わる活動や老人保健に関わる活動等（表4）についての体験が語られた。特に、感染症や母子保健についての活動体験が多く語られた。感染症に関しては、結核、ポリオ、腸チ

フスなどの感染症、予防接種、生活改善活動をしていた。結核については、自宅療養組合という組織を活用して健康教育や患者交流の活動をしたり、清潔の面まで家族の手が行き届かない自宅療養者に対し、「どうしてもやらざるを得ず」全身清拭や洗髪をしていた。衛生活動では、その家庭にできる範囲できれいにしてもらいたいと、まず、家庭の便所を見せてもらっていた。予防接種では、保健婦自身がワクチンの効果を実感し、ソ連製のポリオ生ワクチンへの反対運動があっても「予防対策をやるしかない」思いで実施していた。また、腸チフス等の予防接種には、行列ができるほど人が並び、毎晩泊りがけで行うほどであったことなどが語られた。

母子保健に関する活動では、食糧難の時代に、母乳の出る母親を探して「もらい乳」をしたり、ミルクが出回り始めた時代には、子どもにあう哺乳瓶を探すなどをしていて。また、家庭訪問で児の股関節脱臼を把握し受療につなげるなど、小児整形の知識を持つ専門職が少ない状況下で、保健婦が疾病の早期発見をするという自覚をもって活動していた。その他、乳児の全数訪問、家庭の台所に入っの離乳食指導、乳児健診時に子どもの状態にあわせてミルクの配給量を決定する体験などが語られた。

結核患者への清潔への援助において身につけた介護方法を活かし、老人保健対策において、生活用品を工夫した介護方法の指導を婦人会でした体験もあった。

その他、復員軍人の健診の体験、国保所属の保健婦として国保加入者の療養のことで医師に連絡をとった体験なども語られた。

3) 無医地区での活動体験

無医村の保健婦であった人からは、町の病院へ電話をして指示を仰ぐこともあったが、その場で看護専門職と

表2 保健所における活動体験

<p>1. 感染症に関わる保健師活動</p> <p><結核>・25歳の男子の健診をした。あの頃は結核が多かったでね。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・(家庭訪問に)行った時に、若い男の人、暗いところで寝ててね、・・うちの人誰もおらへんで、1人で寝とる。「お大事にねっ」て言って帰ってこようと思うと、「保健婦さん」て言うんやって・・「今度いつ来てくれる？」って。ぞーっとしおった。治らんでね、あの頃は。 ・予防接種や結核の家庭訪問を行った。 ・保健所では、結核患者訪問が主だった。 ・村が無医村で、〇〇という地区に紙芝居を持って行って結核の健康教育をした。 <p><性病>・もう戦後は性病とか結核とかいろいろすごかったですよ。それとやっぱり進駐軍という人が駐留してて、・・・商売してる人がいっぱいいて、そういうところからもらってくるのね。そうすると・・・追求に行かなきゃいけない。誰からもらったというのがすぐわかるもんですから、その人を探して、治療させるとか、隔離するとか・・・。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・遊んで帰って来て、病気を拾ってきて、奥さんに怒られて検診に来るんですよ。そうすると聞いてて、今すぐ白であっても、2週間以上経たないとでてこないとかね、そういう話をしなくちゃいけないでしょう。・・・やっぱり保健婦さんじゃないとそこらへん言えないんじゃないでしょうかね。 ・あの頃終戦後でね、戻ってきた軍人がいっぱいおってね。すごく性病が多かったの。・・・それぞれ感染源調査っていうのを出すの。そういうのも・・・調査に行くの。嫌な仕事やと思ったですよ。 ・敗戦後で、性病治療のためにクリニックに来所していた人が多かった。自分が若かったためか、診察介助につかないよう職員が配慮してくれた。当時、梅毒や淋病が流行しており、使用した注射器を洗うのも心配しながら行なった。 ・そういう方(淋病の男性の)に保健所では、ペニシリンを注射していたので、その後の家庭訪問に行くぐらい、何回も行っていかなかったです。 ・その当時は、どの保健所も必ず性病(のための)診療所併設ですから、そういう方達の家庭訪問もありました。 <p><予防接種>・保健所では、医者に同行して学校で予防接種をしたり・・・</p> <p><生活改善>・当時シラミ・・・発生が多かったですね。そうすると消毒なんかもあるわけでしょう、DDTとか頭に散布したり、背中へ・・・散布したり。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・小学校に頭のシラミの駆除に行った。 ・町がものすごく裕福な所でしてね、特に村長さんも衛生主任の方もものすごく理解がありました。ああしたほうがいいっていうと、必ずそのようにして下さったり。衛生面の設備で、例えて言うと、トイレでも、今のように水洗ではない時代ですけども、衛生的に悪いから塞いだ方がいいとか、昔は簡易便所・・・にするといいですよと説明すると、すぐに取りかかるようなところで。随分そうやって便所の作り替えをなさったと。
<p>2. 母子保健活動</p> <ul style="list-style-type: none"> ・乳児健診
<p>3. 栄養改善</p> <ul style="list-style-type: none"> ・電気も通っていない所で、ランプの生活だった。貧しい時代、そこ的人是にトチノミを食べていた。栄養失調が多かった。子どもたちも栄養失調の状態だった。保健所の栄養師と栄養指導も行った。雑草を食べる方法を指導していた。タンポポやセリなど。さおの体重計で、大きな布に人が入って、さおではかりを端につけて体重を測った。大人もそれで体重を測っていた。保健所から車に乗って出かけ、学校などに宿泊して教育を行った。子ども達が珍しがって保健師たちの後をついて歩いた。 ・栄養指導にしても、こういう物を食べると体が丈夫になりますよなんて、豆とか豆腐とかね、豆腐の作り方が分からんから、豆腐屋さんに頼んできて、婦人会でちょっとした調理実習みたいなのを、(簡単な)豆腐の作り方をやっていただいたり。
<p>4. 精神保健活動</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ある時は、精神病患者を精神病院へ送ってた時もあります。「頼むでついていってくれ」って言われて。向こうがやってくれといわれることは全部、こちらもありましたけども。こちらがこうしてほしいっていうと、すぐにそのように従って下さったんですわ。
<p>5. 駐在保健婦の活動</p> <ul style="list-style-type: none"> ・公衆衛生院やっていたからには、何か恩返しする事ないかと考えまして。費用をたくさんもらって行きましたから。保健婦の町村駐在制を講義で聞いてたもんで、所長さんに相談しましたら、ものすごく理解のある方で、「その仕事に僕は応援するから、やってみるか」ということ。その村は、わりに裕福なことで、村長さんも理解のある方で、1ヶ月に6日間づつの保健婦の町村駐在制という制度を作っていただきました。村会で意見が一致しまして喜ばれてねえ、そしてもう一人、協力して下さる方と二人で行ったんです。 ・婦人会の話やら乳児健診やら、家庭訪問やら、家庭訪問は乳児やったんですけどね。随分楽しかったですわ。 ・産児制限の講演をして下さいっていうんで行ったんです。保健所の職員の方も3,4人ついてきてくださった。次の年の正月のどの新聞にも出たんです。 ・(好評だったので、他地区からも)そういう要請がありまして、そこへは5日間づつ行ったんですよ。そこでも同じようなことやって、家庭訪問やら、乳児健診やら。診療所もあったから、診療所のお医者さんと相談しましてね。結構喜んで下さって。その当時は他所よりも変わったことをやろうという町村が多かったもんで、そういう要請はものすごくありましたけども、人が足りなくてできれんですわ。ほんでもう1ヶ所だけ、1週間に2日ぐらい行ったことがあります。
<p>6. その他</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ハンセン氏病の健診には行きました。保健所に3年ぐらいおったけども、5,6人はありました。島へ送られてく人が。保健婦養成所の時、修学旅行がその施設でした。ちょうどその様子がよく分かるから、説明した覚えがあります。恐いところでもなんでもない。楽しいお家ばっかだよというようなことを話したような覚えです。年齢的には、小学生もおりましたしね。若い18、19の娘さんもありました。本当、見とつてもかわいそうやったですよ。 ・やっぱり周囲の理解やね。私は喧嘩してしまう方やったんですけども、特に学校なんかは、調査しようと思うと、担任の協力得なきゃね、調査出来ないでしょ。保健所でも、町村の協力が無ければ、集計が出ませんから、そういうのが大変ですね。 ・保健所から来ましてっていうと、保険の勧誘員と間違えられましたよ。文章見せてちゃんと説明するとやっと分かって下さったり。保険の勧誘と間違えられて追い出されたりは、それが当たり前やったですわ。

しての知識を動員して考え、行動した体験が語られた(表5)。村人は、「急遽～してほしい」と保健婦を迎えに来るため、とにかく現場へ行き、「ホルマリンを間違えて飲んでしまった」人に卵白を飲ませたり、「後産が下りてこない」人の下腹部に両手をしっかりあてるなど、判断が間違ったり手遅れになれば命にかかわる体験もあった。また、「戦後の農山村の大切な仕事」の寄生虫駆除のため、夜中に訪問して熟睡している子どもの肛門に蠟燭の灯りをあて、ギョウ虫を取り除く様子を親に見せて、清潔の大切さの教育をしたり、その母親からその事が口

コミで広まっていく体験などが語られた。

4) 養護教諭等としての活動体験

養護教諭として、保健の授業の実施、食中毒に気を付けながら婦人会の人と協力した給食づくり、ノミ・シラミ対策を行っていた。また、児童の身長から適切なイスや机の高さを割り出す方式を提案したり、新築校舎建設時に、養護教諭の視点を活かした保健室の設計を考えたなどの体験も語られた(表6)。

5) 企業保健婦としての活動体験

女性であるために意見が言づらい中で職場巡回指導

表3 市、村(国保)における活動体験(その1)

<p>1. 感染症に関わる保健師活動</p> <p><結核></p> <ul style="list-style-type: none"> 結核が多かったでしょ、だから自宅療養組合っていうものも作りましてね。それで入院が出来ない、自宅で療養しないといけないっていう(事情)があるでしょ。自宅療養組合っていうのをね、五年ばかりやったかなあ。そういう組合作って県の方へも報告していると、栄養が十分満たされていない時代でしたもんで、卵の配給は優先的にその自宅療養組合へ渡ってね、その方たちを呼んで、いろいろ結核に対してのお話しとか、また患者さん同士お話ししてね。そしてこういう病院はいいよとかなんとかってそういう話しも出てきますしねえ。 最初はとにかく結核予防対策ゆうたら、痰の始末から入りました。新聞紙を三つ折に袋作ってそこへ入れて、燃やすとか。畑があるとこやったら畑へ、掘って入れるとか。そういう痰の始末から最初やりましたね。 訪問カバンの中に体温計と割ぼう着なんかもありましたし、消毒綿とかピンセットとか、ケガしてみえれば治療もしてあげないといけないから、そういう一式の道具を訪問カバンの中に入れて持って訪問しまして、自宅へ行きますとエプロンに替えて、洗髪もしんならんかったからね。病院で入れないもんで家庭で全身清拭とか洗髪、それも結核の方のやりました。・・家族の方も、そういう(結核で)自宅療養してみえる人っていうのは、結構まあ苦しんでみえる家が多いでしょう。そういう事まで手が回らないでね。だからどうしてもやらざるを得んでしょう。 <p><ポリオ></p> <ul style="list-style-type: none"> ポリオが出る前ね、小児マヒ出るでしょ、調べに行くと、川伝いで5人も6人も小児マヒになっとんの。本当あの時びっくりしました。こんな続いてこんな川伝いになっとんかと思いましたが、調べに行って。だけどポリオができるようになったら、もうパッと止まりました。あれは有難いなあと思います。 ポリオの時は(ワクチンが)ロシアから入ってきたんやね。最初にね。そしたら、ある工場の労働組合が、全く反対するの。「ロシアから入った奴んたあ、やるやない」ってね、労働組合が。あの時は図書館が公民館みたいになっとったで、中では注射やとる、外ではワーワーと労働組合がね。ほんでもやりましたよ、やっぱし、予防対策やらないいけないでしょう。 <p><腸チフス、日本脳炎、トラコーマなどその他の感染症></p> <ul style="list-style-type: none"> トラホームも多かった。役場で洗眼した。子どもをまとめてA市の眼科に連れて行き、手術(トラホームの粒をつぶす)をしてもらった。その後は保健婦が洗眼をしていた。子どもだけでなくおじいさんも一緒に洗眼しに来た人もいた。 毎日腸チフスの予防注射、朝晩、晩もやりました。勤めている方なんかは、昼間できんでしょう。徹夜でそれこそ家へ帰ることができんぐらい。帰れないもんでねえ、役所の中で泊まってねえ。市役所も焼けてるもんで、図書館の中に保健係っていうのができて、図書館の中の何にも暖房がきかんところに、泊まって夜遅くまで予防注射やりました。ほらえらかったですよ。 もうとにかくね腸チフス、それから日本脳炎。日本脳炎なんか、みんなが恐いっていう頭がありますでしょ、それで来る来るわ、予防注射に来ますでしょ、食糧難やったもんで、配給があったでしょ、一番最後の方は、配給のもんやと思って並んでね。「何これ予防注射の列？」てなもんで、そんなくらい並んだの。 訪問という腸チフス出た方なんかの経路、なんで伝染したか、どこから出たか、それをみんな調べに行った。もう川伝いね。洗濯するでしょ、今みたいに水道が無いもんで、川で洗濯するでしょ、ほんで川伝いで伝染しているなあっていう。どこから伝染しているかっていうそういう調査に出かけました。 <p><予防接種></p> <ul style="list-style-type: none"> 私達入った時なんか、予防注射なんか、今では想像できんね。七輪に火をおこして、お鍋で注射器を消毒してたの。だからね、原始的やわね本当に。下っぱの者は、早く行って七輪の火をおこして、きちっと消毒して。消毒だけはきちっとしてかないと怖いから、きちっと入れ物に入れて、始まるまでにきちっとやりました。 予防注射ばっかし、それこそ、注射器を消毒しんならんし、針かえならんし、もう大変でした。その時は1本の注射器に5人できるもんで、それこそ拭くだけぐらいで最初はやってたけれど、それが難しくなってきたでしょ、ほんで市は早くから一針一筒にしましたけれどね、・・先生もかえたか、ちょっと置いたやつでやっているといかんでしょ、ほんでその目は光らせないかんし・・。そんだけの注射器を消毒ができんね、ふかすお鍋ね、深い、あれを五つぐらい、中にボンボンに注射器入って消毒。消毒は厳しくやりました。 予防注射やるにしても今みたいに公民館でやりますとなくなっって、地域細かくやらんとできん場合があるでしょ。そうするとあるお寺さんを借りるとか、会場借りるのにやっぱ地域の自治会長さんの了解を得て、自治会長さんの方から話しをかけてもらわないといけないっていう・・。だからそういう事に対しては、自治会長さんの交流は結構ありましたねえ。何やるにしても。 <p><生活改善></p> <ul style="list-style-type: none"> お便所なんか外ばかりで。不衛生になつてると、私達ある程度のその家庭ができる範囲内の事できれいにしてもらうっていう事は、してこないかんわけでしょ。だからそういうことで、お便所も入っていけるし・・。 	
--	--

をし、勤務中に職場内で自殺した人がいた場合に死後の処置をした体験が語られた(表7)。

IV. 考察

1. 県の衛生行政と養成所1期生の卒業後の看護職としての体験

戦後の窮乏生活の中で大きな健康問題は感染症であった。まず、当時の岐阜県の実情と照らしながら、養成所卒業生の体験をみていきたい。

昭和20年代の岐阜県では、赤痢・疫痢、腸チフスなどの消化器系伝染病は毎年発生、また、しょう紅熱、日本脳炎、天然痘、泉熱、トラコーマなどは頻発、性病、寄生虫疾患、食中毒は多発していた。そして、結核をのぞく感染症による死亡者は毎年千人近くを数えていた²⁾。トラコーマは、その予防のため小・中学校での養護教諭

の充実が昭和26年県議会で要求された³⁾。卒業後の経緯をみると、保健所保健婦から養護教諭等への転職者が数人いたが、その背景には、男性が足りず、学校を出ていたり資格をもち働いている女性への期待があったことと、この議会での要求があるのではないだろうか。ポリオについて「昭和30年ごろからポリオは散発し始め…(中略)…国内に十分なワクチンの保有がなく、さりとて衛生教育を中心とした啓蒙活動だけでは子どもを持つ親の心配は治まりません。…(中略)…36年には、…(中略)…ソ連製生ワクチンが緊急輸入され、全国の生後3ヶ月から12歳未満の児童・幼児に対し、経口生ポリオワクチンの一斉投与が行われました」⁴⁾とある。今回これにまつわる体験が語られたが、ポリオが散発している状況下で保健婦自身予防接種の効果を実感し、どこから入手されたワクチンであっても、子どものポリオ予防を第

表4 市、村(国保)における活動体験(その2)

2. 母子保健活動

- ・最初とはにかくミルクが無いし、母親の栄養は無いから、母乳は出ないし。今から思うと本当に大変だった。母親はヤギの乳を飲ませたりするんやね。牛乳でもそうたくさんないし、牛乳を新生児に飲ませられないしね、ほんでもらい乳、母乳の出る母親を探し、頼んだりしました。・・あんな時分、米の粉をすって「それ飲ましたらあかんよ」っていうのに飲ませてしまうんやね。次行くとき足がボンボンに腫れてしまつとるの。それで「あんた飲ませたね」って。あの頃あるビタミン剤がありましてね、そういうのを使って(対処)しました。
- ・農村であったが、野菜を食べるのが少なかったのか栄養が偏ってて授乳している母親が脚気になることが多かった。子どもがやせかけていた。医師の許可をもらって脚気の母親に毎日注射をしに通った。ブドウ糖や栄養剤も医師の許可をもらって家に注射しに行った。
- ・今度はミルクが出たら、哺乳瓶が嫌う子が多くってね、それが難儀しましたねえ。全くもう飲まない子が多くてね。困りました。夜中でも母親から電話がかかってくる事がありましてね。「飲まない」って母親必死やわねえ。そんな時分車も無いしねえ、走って行ってあげたりしましたけれどね。
- ・だんだん、(社会状況が)良くなってくると、私達も欲が出てってね、あれもやりたい、これもやりたい。栄養士の免許持ったらんけれど、離乳食指導やりたいとかね。たくさん道具も買ってもらって、先生に聞いて、離乳食指導もやりましたね。結構、母親も一生懸命離乳食作ってね、私らも出来る出来ないはともかくとして、教えてもらっては、離乳食指導もやりましたね。
- ・今みたいに地域に公民館というもんが無いでしょ、だから自治会長さんのお部屋をお借りしてみなさん呼ぼうって、そしてスライドを見せたりして家族計画指導をしましたね。盛んにやりました。
- ・地域の方とも親しかったし、自転車で私達訪問だったからね、・・何でもそう言って子供の事なんかでも、途中で相談してくれたりね、してもらえたんやわね。自転車やもんで、追っかけられて、呼んで下さったでね。
- ・赤ちゃんの時代から家庭へ入れるっていうのは、保健師だから。私が役所へ入った当時は、もう全部回りました。一軒一軒家庭訪問しましたからね。だからいろんな状況も良く分かったと思います。
- ・離乳食指導しようと思えば、お勝手場へ入ってって、不衛生になつてはいかんで、「こういうふうに消毒しないかんよ、こうやってお茶わんあれして、赤ちゃんにはこうやって対応しなあかんよ」って言うってお勝手へ入っていけるわけでしょ・・。
- ・結婚式場・・・、結婚式場申し込んである人が集まる機会があるでしょ。そういう時に呼ばれて行った事もある。家族計画といろんな生まれてからの子どもの感じ方っていうか、子どもを育てる時の感じ方とか、2回ぐらい行きましたかしら。
- ・お嫁入り先から帰ってたもんで、訪問に行った。完全脱臼したけどね。未熟児でしたけどね。完全に脱臼しとるっていうのが分かるのに、(先生からは)何にも言われなかったって。もう2ヶ月たつともんで、「完全脱臼しているで、早速、とにかく行かないといけないうよ」て言うて、病院行きなされたけど。・・我々がよく分かるのが放置されていて、保健師もそういう事も発見出来るっていうことをね・・あの時分ものすごくありました。
- ・子どもの健診は、子どもの状態を見てミルクの配給量を決めたりした。
- ・乳児健診もあの当時一生懸命やってみえましたでね、私も一生懸命さしてもらいました。・・乳児健診は、やらないいけないでね、やりましたけどね。乳児健診いってもねえ、終戦後ミルク無いし、本当にどやったらいいかしらなんて思いましたねえ。

3. 老人保健活動

- ・老人保健(法)ができて、その老人に対する介護の方法も自然と身についてきていたね。婦人会の方を集めて洗髪の方法とか全身清拭の方法とか、婦人会の方も結構そういう関心がある時代になってきていましたからね、だからそういう介護の方法をやりました。今みたいに道具が、洗髪する道具も無かったでしょ、だから新聞紙で便器を作ったり洗髪する方法、そういうものを指導しました。

4. その他

- ・復員軍人の健診は、その頃力を入れていた仕事だと思ふ。栄養失調で帰ってくる人も多かった。
- ・国保所属の保健婦という立場だったので、国保に入っている人のことで医者のところに話をしに行くこともあった。

表5 無医村での活動体験

- ・昔の無医村保健婦、それは今の僻地診療所のような役目も背負っていました。町の病院へ電話をして指示を仰ぐこともありましたが、殆どはその場で考えて行動しなければ手遅れになることばかりでした。ホルマリンの時もそうでした。お酒を好きな近所の40歳くらいの方、夏の暑い日、畑仕事から帰って喉が渇いていたので一升瓶からコップに注いで一気に飲みました。昭和23年ごろ物資は極度に乏しく酒瓶は大切な入れ物でした。蚕室の消毒用に準備していたホルマリンを間違えて飲んだのです。ご主人が血相を変えて迎えに来ました。とっさに鶏小屋から卵2個持って一緒に走りました。閃いたのは卵白で中和することだったけれど、間違えたらおばちゃん死ぬ・・・電話は50数戸の部落にたった1台手回し式で役場に通じるものがあるだけ、どうしようと思っている間にその家に着いた。急いで卵白1個分飲ませた。正解の予感がしてもう1個飲ませた。助かった。
- ・昭和21年のある日、出産後3日目だが後産が下りてこない、トイレも行った、引っ張ってもみた、いきましてもみたが駄目です。来てほしいと迎えが来た。熟練を誇りにしている取り上げおばさんの前で若い私に何ができるのであろうと考えた。行きたくなかった。命がかかっている産褥熱の怖さは勉強していた。行かなければと思い直して急いだ。名案どないまま行って産婦のお腹に両手を揃えてしゃっあててみた。体温は低かった。話し好きな人たちの話を耳にしながら、目は産婦のほうへ、両手はしっかり下腹部にあてて2時間たった。産婦があれと声をあげた。後産は順調に下りてきた。私は両手を通じて神の助けがあったと心から思った。
- ・寄生虫駆除も戦後の農山村では大切な仕事でした。回虫はほとんどの子どもがもっていましたので、小学校で駆虫薬を一齐に飲ませました。ギョウ虫の場合は、夜中に訪問したこともあり。体が温まって熟睡している子どもの肛門を蠟燭の先で見ると1.2cm位の成虫が産卵のために出てきます。ギョウ虫はよく動くのですばやく取り除きます。母親にこの現実を見てもらおうと、非常に驚き感動し肛門や手指の清潔に非常に気を遣ったり、他の母親達にも伝えてくれてやりがいもありました。(当時懐中電灯もなく、当地区は鉱山社宅を除いてランプの生活でした。)
- ・ジョウ虫については実際にであったのは1回です。私が駆けつけた時、3歳くらいの女の子の体から10cmくらい出ていました。遊びに夢中の子どもの肛門から虫が下がっているのを見つけたのは母親です。ひと目でさなだ虫だとわかりました。しっかりと子どもの体を支えてもらい、少しずつ引き出しました。ひっぱりと平べったい体がちぎれることなく少しずつ出てきました。母親と子どもと私と3人とも、体の位置を変えたり汗を拭いたり声をかけあったりずいぶん長い時間をかけてひっぱり続けました。切れたという感触はなかったから、全部出たものと思います。・・・小さな金たらいにいっぱいあって幼児の体でよくこんなになるまで成長したものだと思ってきました。(プラスチックのない時代、たらいは銅か木桶でした)
- ・部落があって、・・・へんぴなところなんですけどね、そういうところへ行って、学校の宿直室みたいなところに泊まるとって、1ヶ月のうちの半月はそこにおるとか、そういうことをやっておるうちに、そう、雪が深くて、・・・人がみえて「昨日からお腹が痛いんだけど」夜中に迎えに、提灯をさげて、峠を越して歩いてくるんですね。部落ごとに峠を越さんと、行けない。で、峠を越して迎えに来てくれたから、とにかく行って。明らかに私の目にも盲腸炎だなんて思ったもので、勿論病院へ連絡したりそういう事は、何かの時はするんですけど、当然そんな時は出来ずにとにかく氷を探してきてもらって、雪はあるけど氷はないっていう時でね、わりも(弁当箱)を持って、ずっと山のほうへ行って米をつく所とばかりがとんでおるのが氷になっておる。そうゆうのが集めてきてくれたので、一晩中冷やしたんですけど、二晩くらい泊まったかな、そこに。そして盲腸が具合よく散ってね。

表6 養護教諭等としての活動体験

- ・保健婦の免許や看護婦の免許があったので、担任をしながら衛生や給食のこともやった。健診もやった。生徒は、シラミをたくさんもっていた。髪の毛の長い女の子は、髪の中にある。耳の後ろに卵がたくさんついてた。DDTをまくことをした。トラホームも多かった。薬を目に入れることもした。また、回虫も多かった。医師に検便検査に出すが、遅れて提出された検体を顕微鏡で見て回虫の卵を調べた。回虫の検査はずいぶんやった。冬場はかぜの生徒ののどにルゴールをぬったりした。何でもやった。当時は、給食が週何回かで、毎日ある完全給食ではなかった。食べるものがないので、生徒にイナゴを取ってこさせて学校に持ってきてもらい、出し汁に使ったりした。調理用の薪ももってきてもらった。ご飯は、生徒が持参していた。火鉢の上で持ってきたご飯を温めたりした。
- ・養護教諭の資格を得たので、養護教諭として小・中学校を兼務した。しばらくして、兼務でなくなり、中学校で勤務した。当初、保健の教科書がなかったので、困った。一週間に7時間ほど授業をしていた。小・中兼務の時は、給食の献立づくりもしていたが、専任になってからは行なわなかった。
- ・当時、無医村だったので、勤務先の小学校は、養護教諭を配置する指定校だった。脱脂粉乳が配布されるようになり、味噌汁給食を始めた。給食の献立づくり、家庭科の授業も行なっていた。給食の味噌汁は、自分ひとりではできないので婦人会に頼み、当番(2人)で学校に作りに来てもらった。味噌も、婦人会に頼んで作ってもらった。給食づくりは、手洗いなどの食中毒予防に気をつけ、発生に備えて必ず1食残すようにしていたが、幸い食中毒は発生しなかった。結果的に、婦人会には、味噌汁作りを通して、食中毒予防や栄養指導など健康づくりに関する保健指導を行なった。婦人会の人々は、非常に協力的だった。
- ・ノミ・シラミ対策として、児童にDDTをかけていた。
- ・保健の授業を一週間に10時間ぐらいはやりましたね。
- ・養護教諭の仮免で来ての方がありますので、そういう方の教育っていったらおこがましいけど、そんなことをしてほしいって頼まれたこともあります。
- ・給食が始まりましたので、給食の献立の指導をした。栄養士が派遣されていないし、もちろん給食センターなんてその頃ありませんから、給食が始まったすぐは、給食の献立に振り回されたり。
- ・学校で保健教育の実験校になった時、子供の身長で割り出せるような、机の高さ、椅子の高さがないかなと思って。・・・、本にも出ましたが。市役所では喜んで下さった。いい発案やったって。身長にあてて、机も椅子も準備できるから。そうでないと、すごい背の高い子が低い椅子に座ったり、低い机に座ったりね、よく教室へ行くとそういうことがありましたので、子どもが迷惑しますからね。そんなことはダメだから、姿勢が悪くなるからってということで、身長を基準にした机と椅子の選び方というような題やったと思います。文部省からも市役所からもその事で調査にみえて、恥ずかしいくらいだったんですけど。
- ・校舎を新築する時、保健室の設計をその時の校長先生がものすごく理解のある方で、「折角の保健室を作るなら、専門家がこういう作り方がいいと思うものがあつたら、お前設計してみやあ。教育委員会頼んでやるから。」と。保健室の外にちゃんと手洗い場があって、外からドア一枚で入ってこれるという保健室で。廊下の方から入ったら入り口を隔てて、片方は女子専用、片方は男子専用と頼んだり。中の細かい事も結構その通りになったようです。

表7 企業保健婦としての活動体験

- ・職場巡回とかね。・・・現場行って、・・・筆筒が廊下に置いてあって埃なんかかぶとったりしたら、これではいかんでってこうしてほしいってことを課長に言わんなんでしょ。ほんなもん、女でできないですよ。言えないけど、巡回日誌書かんならん。
- ・事務所の人だけと結核で、1週間に2回注射打たないかんですよ。忙しくて行けないって、来ない。そういう人がおると家族の人にも、家族感染しとらんかって。
- ・首吊って死んだ人がいる、作中に。・・・電話がかかってきたの。検死するまで触らないでねって言ってね。ちゃっと囁託の先生に電話かけて。触らんように注意とききましたよ。・・・屋から線香のお守りしとったですよ、休養室で。売店で浴衣買ってきて、下着も買ってきて、検死済んでからきれいにして。

一義に職務を全うしていたように感じられた。腸チフスや日本脳炎に関しては、朝も晩もと予防接種に迫われた体験が語られ、日夜をわかつたぬ苦労があったものと思う。多発していた性病については、昭和23年に性病予防法が公布され、売淫常習の疑いのある者に強制健康診断や性病患者の強制治療が実施され、都道府県は性病の検診・治療のための病院や診療所を設置することになった。県の28年度重点事業には、「保健所の充実、結核予防対策、各保健所に性病診療所の設置、看護婦養成」などがあげられている⁵⁾。性病に関する活動で、「当時はどの保健所も性病の診療所併設・・・」とあるのはこのことであった。性病予防のための感染源調査や診療所受診者に家庭訪問し事後追跡するなどの活動を保健婦が担っていたことがわかった。

結核は戦前戦後の主要死因の一つであり、岐阜県では昭和25年の全結核による死亡者数は人口10万対154で、死因第一位である⁶⁾。昭和26年に結核予防法が施行され、学校、事業所、一般住民の定期健診が義務付けられ、患者への家庭訪問が始まるなど結核対策の強化や抗結核剤の普及が図られた。保健所や市の保健婦であった1期生からは、健診や家庭訪問の体験、清潔の面まで家族の手が行き届かない人に「どうしてもやらざるをえず」全身清拭や洗髪を行ったという体験も語られた。当時は、保健婦以外に家庭での療養生活を世話する専門職がいなかったこともあろうが、結核患者への指導ひとつとりあげても、保健婦は、家庭訪問により患者がおかれている生活の現実を見て、看護職としての責任として、清拭や洗髪などの家庭看護を行いながら、療養生活を支援していたことが伺えた。

次に、戦後当初の大きな問題であった食糧難⁷⁾との関連で卒業生の体験をみていく。保健所の保健婦だった人は、栄養失調が多かったため雑草を食べる方法を指導していた。養成所時代に行なった柿の葉を利用した栄養指導実習の経験も活かして指導したのではないだろうか。その離乳食指導や生活改善指導においては、台所や便所を自分で見て実態を把握していた。このように1期生は、地域の生活を見て、よく知り、その生活の中で取り入れられる方法を指導していたことがよくわかった。

昭和22年に保健所法の改正があり、岐阜県でも全県下に保健所網が敷かれ、保健所が公衆衛生の活動の拠

点となった。「戦後の窮乏生活の中でも大きな健康問題は結核や腸チフス、赤痢などの感染症対策のほか、母子保健、栄養改善、食品衛生などであったが、技術者集団からなる保健所の働きには大きいものがあった」⁸⁾とあるが、その中でも保健婦は、当時の健康問題に対応して、家庭訪問や健診、予防接種、健康教育、栄養指導など様々な活動を通して衛生行政を推進する担い手であったことが伺えた。特に、住民の生活の場で人々の健康を守る専門職として機能していたことが卒業生の体験からわかった。

当時「保健婦」ということが理解されずに、保険の外交員と間違われた体験なども話された。保健婦規則は昭和16年制定であり、彼女らが就職してしばらくは、保健婦の認知度は高くなかったと考えられる。そういう中で、1期生は、予防接種をする会場手配のために自治会長と相談したり、栄養士と一緒に栄養指導をしており、専門職・住民を問わず、よい協力者、理解者を得て共に歩んでいる姿がうかがえた。保健所長の理解を得て駐在制の活動を始めた保健所保健婦のように、特に、組織の長の理解を得ることで、創造的にしくみをつくる活動をしていたことがわかった。

2. 岐阜県の養成所卒業生の体験として特徴的な活動

無医村における活動と村の駐在制における保健所保健婦の活動をとりあげる。

昭和19年当時であるが、無医村は140余り、農村での健康管理は課題であり、その年には合計50名の保健婦設置が県の無医村対策の一つ⁹⁾となっている。無医村の活動では、住民から「とにかく来てほしい」要望があり「この判断が間違えれば命に関わるかもしれない」という状況下で援助を行なうなど、問題に直面した時に、知識を統合させ、判断し、行動していた様子が伺えた。その上では、病院医師に相談して指示を仰ぐということもあったが、電話もない時代にその連絡すらままならず、自らが判断し行動しなければならないこともあった。それは、無医村のような社会的な問題のある地域での保健婦活動としてよく知られている開拓保健婦の活動のように、求められるときに訪問し、命に直面した待ったなしの状況で問題に対応し、必然的に個別支援・生活に入り込んだ活動¹⁰⁾と同様の活動のようであった。この体験を語った者は、養成所で培われていた基本的な職業意識

に加えて、現場で問題に直面し援助の要請を受ける中で、頼れるのは自分ひとりであると専門職としての責任性をひときわ認識し、行動していたのではないかと考える。

飛騨地方など山間地区は無医地区が多く、急病者の発生があっても医師の到着前に死亡したり、医療費の負担も重く、昭和初期から医療組合運動が芽生え、戦後は農業協同組合法が制定、23年8月には厚生連が設立されて医療機関の運営や保健予防活動、保健資材事業が行われてきた¹¹⁾。今回、無医村の活動を語ったのは厚生連の前身の農業会に従事した者であった。山間部の多い岐阜県にあって貧しい医療事情下においては、保健婦は、命に関わるかもしれない判断を自ら下し、住民の健康の保持を図る活動をしていたといえよう。

村の駐在制における保健婦の活動に関して、その制度をつくった保健婦に話を聞いた。県が市町村に保健婦を配置する駐在制度としては、沖縄県や高知県が知られているが、岐阜県の場合は、1ヶ月の内5日間ほどの駐在で、保健所の管轄区域は大部分が農山村で交通の便も極めて悪く、一般の人々が保健所を利用するにも、また保健婦が家庭訪問を行う場合にも時間的に制約があるため、町村の駐在制を採用したそうである¹²⁾。駐在制のきっかけは、公衆衛生院での研修であった。保健婦は、村人や村の長から求められる形で村に入り、診療所の医師などと相談しながら家庭訪問や乳児健診をしていた。沖縄県のように、離島や僻地に配置され、その地区に住みながら結核在宅患者の管理まで責任をもたされ活動をした公衆衛生看護婦の駐在制度¹³⁾とは異なるが、家庭訪問により家庭に出向いた活動を重視していた点では共通性があるのではないと思った。

それは、医療機関等が村になく手遅れになるような状況があるので、そういう事態を防ぎ健康を守るために、保健婦の責任として村に出向く活動をしていたのではないだろうか。一方の受け入れ側の村は、「よそよりも変わったことをやろう」と駐在保健婦を村の特徴的な活動として受け入れていた様子もわかった。駐在制度は県下の一部であったが、それ以外にも無医村に出向いて結核の健康教育を実施するなどしており、保健所が資源の少ない村をどう支援していくかは今につづく課題のように考えられた。

V. おわりに

岐阜県保健婦養成所1期生の体験をまとめた結果、戦後当初の食糧難という大きな問題がある中で、一般県民の栄養状況も十分なものでなく、感染症が多発し、それによる死亡者も数多くいる状況下で、保健婦は、感染症に関わる活動、栄養改善、母子保健活動など、当時の健康問題に対応して、生活の場で健康を守る援助を行いながら、衛生行政の推進の担い手として活動していた様子が浮き彫りになった。岐阜県の山間地区は無医地区が多く、貧しい医療事情下において、保健婦は、命に関わるかもしれない判断を自ら下し、住民の健康の保持を図る活動をしていたことが明らかになった。

謝辞

本論文をまとめるにあたり、聞き取り調査等に快くご協力していただいた岐阜県保健婦養成所1期生の皆様に、深く感謝申し上げます。

文献

- 1) 松下光子, 坪内美奈, 大川眞智子: 保健婦養成所1期生の体験, 岐阜県立看護大学紀要, 6(2); 51-57, 2006.
- 2) 井口恒男: 岐阜県の公衆衛生, 岐阜新聞社, 3-4, 2002.
- 3) 前掲2), 4.
- 4) 前掲2), 4.
- 5) 前掲2), 4.
- 6) 前掲2), 4.
- 7) 前掲2), 2.
- 8) 前掲2), 9.
- 9) 無医村対策, 朝日新聞, 昭和19年1月19日4面.
- 10) 近藤明代: 歴史から見た保健師活動の特徴, 保健婦雑誌, 59(8); 765-768, 2003.
- 11) 前掲2), 10.
- 12) 大沢一郎監修: あゆみ, 日本看護協会保健婦部会岐阜県支部, 14, 1980.
- 13) 金城妙子: 原点をみつめてー沖縄の公衆衛生看護事業, 沖縄コロニー, 2001.

(受稿日 平成18年12月6日)

(採用日 平成19年1月18日)